臨床報告

和漢診療科受診患者の病院選択性と
和漢診療に対する認識福田 正治¹⁾ 嶋田 豊²⁾ 高間 静子³⁾伊藤 隆²⁾ 寺澤 捷年²⁾The Choice of Hospitals and the Awareness of Japanese Oriental
Medicine in Patients Consulted in Japanese Oriental Medicine ClinicsMasaji FUKUDA¹⁾ Yutaka SHIMADA²⁾ Shizuko TAKAMA³⁾Takashi ITO²⁾ Katsutoshi TERASAWA²⁾

- 1) Ph. D., Department of Behavioral Sciences, Toyama Medical and Pharmaceutical University, 2630, Sugitani, Toyama-shi, Toyama 930-01, Japan
- 2) M. D.s, Department of Japanese-Oriental Medicine, Faculty of Medicine, Toyama Medical and Pharmaceutical University
- 3) Ph. D., Department of Fundamental Nursing, School of Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutical University

Abstract The characteristics of hospital selection and awareness concerning Japanese Oriental medicine were studied in patients receiving treatment at Japanese Oriental medicine clinics at the Toyama Medical and Pharmaceutical University and at the Toyama Prefecture Hospital. Selection of a hospital was found to be affected primarily by mass media, such as TV and newspapers in the case of the University Hospital and by interpersonal communications for the Prefecture Hospital. The motivations ascertained were an expectation for disease improvement using Japanese Oriental medicine and anxiety about the side effects of modern medicine. The patients showed a poor understanding of the role of modern medicine in treatments using Japanese Oriental medicine. These data suggest that it is important to disseminate correct information about Japanese Oriental medicine to the public.

Key words: choice of hospital, awareness of Japanese Oriental medicine, patient behavior.

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine), **47**, 277-282, 1996

(accepted 10 Apr, 1996)

緒 言

和漢薬治療は近年、国民の間で関心を集め、厚

生省も1976年漢方薬を健康保険薬に認定した。それに伴い和漢診療科を設置する病院も徐々に増加してきている。これは、患者の病院選択の多様

1) 研, 富山医科薬科大学医学部行動科学, 富山, 〒930-01 富山市杉谷2630

2) 医, 富山医科薬科大学医学部和漢診療学講座, 3) 研, 富山医科薬科大学医学部基礎看護学講座

[1996年4月10日受理]

化、医療の多様化という一般的な大きな流れの一環であると考えられる。和漢薬治療を受ける患者は西洋薬の副作用などに不安を持っており、一般的に健康のための行動に高い認識をもっていることが指摘されている^{1)~4)}。しかし、これらの患者がどのようにして病院を選択したか、また和漢診療に対する認識を調査研究した報告は少ない。富山医科薬科大学付属病院和漢診療部は国立大学の付属病院の中で、初めての和漢診療専門の診療科である。また富山県立中央病院は地域医療の中核病院であるが、同じく和漢診療科を有している。本研究では、和漢診療科の初診患者を対象に病院選択性と和漢診療に対する認識を調査した。

対象と方法

富山医科薬科大学付属病院(大学病院)和漢診

療科を訪れた初診患者513人を対象に、診察前にアンケート調査を行った。比較として、同規模の富山県立中央病院(県立病院)和漢診療科の初診患者150人についても同時期に同じ項目を調査した。調査方法は質問紙による自己記載とした。調査期間は平成6年4月から8月までであった。調査内容は患者の年齢、性別、居住地、和漢診療科を受診した理由、および病院を選択した理由、和漢診療に対する認識などである。質問は構成要因に属する項目をまとめて配置し回答項目を選択する方法を用いた。

結 果

1) 受診者の年齢・性別・居住地

年齢、性別、居住地などの記載がそろった大学病院受診患者465人、および県立病院138人について

図1 患者の年齢分布

図2 患者の居住地分布

図3 なぜ、和漢診療を受けてみる気持ちになりましたか (複数回答)

図4 いくつの病院に行きましたか

て比較分析した。大学病院受診患者は男性187人、女性278人で平均年齢は 46.6 ± 18.3 歳、県立病院受診者は男性38人、女性100人で平均年齢は 49.9 ± 17.1 歳でほぼ同じ年齢構成であった(図1)。居住地はどちらも富山県内が最も多く、大学病院では46.2%、県立病院では83.3%で、大学病院では北陸3県以外からの受診者が45.4%を占めていた(図2)。職業では主婦層が最も多かった(大学病院, 32.6%; 県立病院, 36.1%)。

2) 受診の動機

図3に和漢診療科を受診した動機についての結果が示されている。最も多い理由は和漢診療によ

る症状の改善を期待するものであった。その他、西洋医学の効果および副作用に対する不安が多かった。これらの傾向は受診病院の回数にも現れていた(図4)。大学病院の初診患者の81.1%が、また県立病院の初診患者の75.8%が主訴に対して別の病院を受診した経験があった。特に、大学病院では別の病院の受診回数が平均 2.6 ± 1.7 ($n=342$)で、県立病院(平均 1.8 ± 1.3 , $n=86$)より大きく、中には10回以上他の病院を受診した経験をもつ患者もみられた。

3) 病院選択理由

受診した病院の和漢診療科を何で知ったかを調

図5 この和漢診療科を何で知りましたか (複数回答)

図6 なぜ、この和漢診療科を選びましたか (複数回答)

査した結果を図5に示した。大学病院ではラジオ、テレビ、新聞、雑誌などから知ったと回答した者が最も多く、52.9%がマスコミ関係を通じて病院選択の情報を得ていた (県立病院、29.6%)。それに対し、県立病院では患者同志や知人、家族からの情報が56.8%と大学病院の38.4%と比較して多かった。受診した病院を選択した理由に関して両者とも「自分の判断で」と回答した者が最も

多かったが、大学病院では「マスコミが報道していたから」と回答した者が16.7%と県立病院の5.9%に比べて多かった。一方、「患者、家族または知人にすすめられたから」という回答は県立病院では46.4%と大学病院の36.6%に比べて多かった (図6)。

4) 和漢診療に対する認識

「この和漢診療科は西洋医学の治療も行うと思

図7 この診療科は、西洋医学の治療も行いますか

図8 この和漢診療科で担当医から、現代医学の検査をすすめられたらどう思いますか

いますか」という質問に対しては、「和漢診療が主で西洋医学の治療を併用する」と回答した患者が、大学病院では47.3%みられたのに対して、県立病院では23.4%と少なかった(図7)。「この和漢診療科は普通の西洋医学の科と同じような現代医学の検査を行うと思いますか」という質問に対しては「現代医学の検査をすることがあるが、少ない」と回答した者が約1/3いた。「この和漢診療科で担当医から、現代医学の検査をすすめられたらどう思いますか」との質問に対しては、大学病院、県立病院ともに「積極的に現代医学の検査を受ける」と回答したもののよりも「検査によっては現代医学の検査を受ける」、または「あまり現代医学の検査を受けたくない」と回答した者の方が多かった(図8)。

考 察

和漢診療科初診患者の和漢診療科を選択した理由および和漢診療に対する認識について、富山医科薬科大学附属病院和漢診療科およびそれと同規模の富山県立中央病院和漢診療科を対象にして比較検討した。初診患者の居住地を比較すると、大学病院は県外からの患者が多かったのに対し、地域の中核病院としての性格をもつ県立病院では県内の患者が多かった。この点から、この調査は富山県内地域患者と全国から来る患者の和漢診療に対する意識調査として比較できると考えられる。和漢診療科を受診する患者の病院選択の情報源に関しては、大学病院と県立病院では異なる特徴がみられた。すなわち、大学病院ではテレビ、ラジ

オ、新聞、雑誌などのマスコミからの情報が多かったのに対し、県立病院では患者や知人からの口コミの情報が多かった。口コミによる情報には限界があるため、マスコミ以外にも、地域における市民講座などを利用した和漢診療の知識の普及が重要ではないかと考えられた。

和漢診療科は、治療にあたっては和漢診療を主体に行うが、必要に応じて適宜西洋医学の治療を併用しているのが現状である。今回のアンケート結果では大学病院、県立病院ともに初診患者のかかなりの割合が和漢診療だけを行うと回答していた。また、担当医から現代医学の検査をすすめられた場合、積極的に検査を受けると回答した患者は、大学病院、県立病院ともに40%にも満たなかった。最新の医学検査は和漢診療においても不可欠であり、また疾患によっては和漢薬治療よりも西洋医学的治療を優先すべきと考えられる場合もあるため、これらの点に関して患者に正しい認識をもってもらよう努力する必要があると考えられた。

今回のアンケート結果から、和漢診療科を受診する患者は和漢薬治療に対する期待と同時に、西洋医学に対する不安を少なからず持っていることが明かとなった(図3)。和漢診療はある意味では西洋医学と相補的な関係にあると考えられ、また患者の要望する医療環境の充実という点で重要な役割を果たしていると考えられる。

この調査は大学病院、県立病院の同じ和漢診療科を受診した初診患者の和漢診療に対する意識を比較したものであり、今後は和漢を受診していな

い患者の和漢診療に対する意識を調査し、この結果と比較する必要がある。

結 論

富山医科薬科大学付属病院和漢診療科および富山県立中央病院和漢診療科の初診患者を対象に和漢診療科受診患者の病院選択性と和漢診療に対する認識を比較検討した。患者の居住地は大学病院では富山県外が、県立病院では県内が多い傾向がみられた。大学病院ではテレビ・ラジオ、新聞、雑誌等のマスコミの情報により和漢診療科を知ることが多い傾向があり、県立病院では患者、家族や知人からの口コミによる情報が多いことが明らかとなった。受診の動機に関しては、和漢薬治療に対する期待や西洋薬の副作用に対する不安が高い割合を占めていた。また、この二つの和漢診療科では和漢薬治療だけを行うとの誤った認識を持った患者が少なからずみられ、この点を改善する努力が必要であると考えられた。

文 献

- 1) 宗像恒次：行動科学からみた健康と病気，メヂカルフレンド社，pp.279-282，1991
- 2) 谷口千津留，他：北里研究所付属東洋医学総合研究所における漢方外来の状況，日本東洋医学雑誌，25，37-41，1974
- 3) 松岡京子，福永澄子：総合病院における漢方診療科の意義と役割，日本東洋医学雑誌，45，633-641，1995
- 4) 中野頼子，他：外来患者の漢方に対する認識について，日本東洋医学雑誌，46，121-126，1995